



張龍妹 教授/张龙妹 教授

北京日本学研究中心 / 北京日本学研究中心

日 時 : 2022 年 4 月 7 日

場 所 : 北京日本学研究中心

使用言語 : 日本語及び中国語

聞き手 : 野口裕子

(国際交流基金北京日本文化センター)

時 間 : 2022 年 4 月 7 日

地 点 : 北京日本学研究中心

使用言語 : 日文、中文

采访者 : 野口裕子

(北京日本文化センター (日本国際交流基金会))

【目次】

1. 日本古典文学との出会い
2. 日本の研究者の思い出
3. 研究の変遷
4. 日本古典文学研究の普遍性
5. 中国の日本研究者として
- (1)日本の学術界への貢献
- (2)中国の学術界への貢献
6. コロナ禍での国際化、日中の違い

【目録】

1. 邂逅日本古典文学
2. 回忆日本学者
3. 研究的变迁
4. 关于日本古典文学研究的普遍性
5. 作为中国的日本研究者
- (1)对日本学界的贡献
- (2)对中国学界的贡献
6. 新冠疫情下学术国际化中的中日异同

【本文】

※インタビュー対象者の使用した言語に基づいて整理しています。(下線部は日本語でのご発言部分)/根据采访对象所使用的语言来整理。(下划线部分为受访者用日语发言的部分。)

1. 日本古典文学との出会い/邂逅日本古典文学

我当时,其实我高中的时候,英语挺好的。当时拿了宁波的英语竞赛二等奖。可是高考的时候英语没考好,不能进入英语系。之后我想进哪个外语专业呢,当时我的先辈(编注:师姐)有一个是在二外(编注:北京第二外国语学院)的法语专业的,她说二外的日语专业是特别好的,所以就报了日语专业。こういう形で日本語の世界に入りました。

実は、私の母方のお爺さんはいわゆる抗日战争で亡くなった人なんです。まさかこれから日本とかかわるのかなという思いだったんですけども。しかし勉強していると、日本のことを家族の人にも伝えるようになって、そうしたらだんだん、たとえばスポーツで日本が他の国と試合をやる場合などは日本が勝ってほしいとあって家族も思うようになりました。その後ですね、姪は日本語学部に進学して、今は京都大学に留学しているんですけども。やっぱり日本に親近感を持つようになりました。

二外には日本人の先生や華僑の方たちが多くて、「あの先生たちのように日本語が喋ればいいなあ」と思っていました。日本人の先生の中に名古屋大学で鲁迅を研究されていた中井政喜先生がいらして、その先生についてよく勉強しました。

私、大学を卒業してからすぐに就職して銀行で4年間働いていたんですね。でも、中井先生は帰国されてからも、私が興味を持つんじゃないかなと思うような本をよく送ってくださりまして、就職している間にもこういう風にいろんな日本文化、日本の出版物に接することができました。その図書の中に秋山虔先生の『源氏物語の女性たち』¹という本がありました。私も大学時代に豊子愷が翻訳した『源氏物語』は読んでいたんですけども、翻訳で読むとやっぱり具体的にどういう物語なのか実感が沸いていないですね。秋山虔先生の『源氏物語の女性たち』はまさに普通の読者のための入門書みたいなものなので、こんなに女性たちのことが書かれているのかと面白くて。それを読んで、『源氏物語』の世界が中国の文学世界と完全に違うので、修士で『源氏物語』を研究しようと思うようになりました。それを同僚に話したら、ちょうど同僚の友達の中に、北京日本学研究中心（注：以下「日研センター」）の3期生がいて、こういう勉強をしているということを教えてくれましたので、受験準備をして、1989年に日研センターの5期生として入りました。その頃、中国で日本の古典文学を教えられる大学はまだありませんでした。

入ってからは、自分がいかに無知なのかよくわかりました。大学ではほとんど日本語しか勉強してこなかったし。最初の先生が神戸女子大の大槻修先生なんですけれども（注：当時は甲南女子大学文学部助教授）、和歌と王朝物語を教えてくださいました。今でも先生に最初に出したレポートを覚えています、和歌について書きました。ここで勉強する期間は1年半ですよ。大槻修先生は1学期いらして、その後に梅光女学院大学短期大学部の武原弘先生がみえて1年間。文学コースは5人いたんですけども、古典文学を専攻するのは私一人で、1年間ずっと1対1でゼミで『源氏物語』を読んでいました。変体仮名も全然読めなくて、あて推量で。間違いだらけだったんですけども、1年間を通して少しぐら力はがついたんじゃないかと思うんですが。その時は本当につらかったですけども、今から考えると本当に贅沢な時間を過ごすことができました。

その後は訪日研修ですね。その時ちょうど、私が（その著書を）読んで『源氏』を勉強しようと思ったその秋山虔先生が、国際交流基金の北京日本学研究中心協力委員会の委員で、秋山虔先生が受け入れてくださいました。その頃は秋山先生はすでに東大をやめられて、東京女子大にいらしたんです。それで私は女子大に行きました。私にとっては、女子大は初めての経験で、女性ばかりで、それは本当に新鮮な思いでした。それに、「天下の秋山先生」なんて言われるぐらいの秋山虔先生の授業を直に聞くことができて、本当にすごく幸福でした。

その秋山先生の授業でですね、その時たぶん秋山先生は『紫式部日記』のお仕事をされていたかと思うんですけども、「千年も前の女性がどうしてあのような苦しいことを考えなければならないのか」って、仕事をしている合間に思いが詰まって、お庭に出て石ころを蹴飛ばしたりして気持ちを落ち着かせて、はじめてまた仕事に戻ることができるかっていうようなことを、おっしゃったんですね。「あの秋山先生がそんなことなされるのか」って、その話を聞いてすごく「へえ」って思ったんですけども。その頃、私もまだ『紫式部日記』とか読んでなくて、昨年、ようやく本当10年ぐらいかかって日本の平安と中世、あと韓国の宮廷女性を書いた日記を三冊まとめて出したんですけども、私自身が『紫式部日記』を翻訳しました。だから自分が『紫式部日記』の中国語訳をしている時にはまさに、秋山先生のあの時の体験を体験しているような思いでした。

博士課程に入った時には、すでに秋山先生が東京女子大を定年退職されていたので、鈴木日出男先生の受入で東大に行きました。鈴木先生は秋山先生の教え子なんです。鈴木先生がパリの第三大学で講演することになった時は、その講演の内容をわざわざ秋山先生のおうちに行って、一度お話をして先生に聞いていただいてから、初めてパリに行かれました。だからそういう師弟関係もすごく感動的で、先生と学生というのは本当に一生の間の結びつきなんだと思いました。ただ残念なのは秋山先生も鈴木先生も亡くなりました。鈴木先生はお若いのに急に、70歳ちょっとすぎたぐらいかな。その二、三年後に秋山先生も亡くなられて。

その後にもたすね、東大の三角洋一先生も亡くなられて。三角先生は東大の駒場の方で、留学生を相手に『源氏物語』を読む会というのを、毎週、先生が読んで語るっていう形で、何年もやっておられまして、その先生も急に亡くなられたんですね、若いのに。

2. 日本の研究者の思い出/回忆日本学者

日本教員たち、研究者たちの、後進を育てるという姿勢にはすごく感銘を受けたことがあります。日本に国文学研究資料館という機関がありますよね。そこで日本文学国際研究集会というのがあるんですけども、そこで2010年だったか、発表したことがありまして。外国人のためだから軽い気持ちで行ったんですけども、そうしたら会場が満員で、高名な先生たちもたくさんいらしてすごく緊張しました。それがまた真剣に聞いてくださって、質問して下さるんですね。だからそういう姿勢にすごく感動したんですよ。外国人の発表に対してもちゃんと指導して下さって、後進を育てるという姿勢、そういうのに学びたいと思いました。

また自分の人生観にかかわるすごく感動的な話といいますかね、2016年に神戸に行きました。さっき申しました修士の最初の時の先生、大槻修先生は神戸女子大だから、先生に連絡してホテルでお会いしました。その先生のお話によるとすでに85歳前後、それでもカルチャースクールで『源氏物語』を教えていらっしゃる、それも2回目読み通したっておっしゃるんですよ。1回読むのには25年かかるそうです。だからカルチャースクールに参加している方もそうですし、先生も50年間も同じことを続けていまして、ああいう風に自分も年をとりたいたいなと思いました。そのような先生がいて、そのような学生たち、市民たちがいるのがすごくうらやましいことだと思います。

3. 研究の変遷/研究的变迁

最初に私が修士の時に取り上げたテーマは「光源氏の道心」でした。中国だったら、出家するというのは、何かつらいことがあって、何かきっかけがあって初めて出家する、現世を捨てて来世のために生きるというようなものなんですね。例えば『紅樓夢』の中では、賈宝玉は最後は出家するように書かれているんですけども、それは家が没落してからです。日常的に『紅樓夢』に書かれている仏教信仰とかは、どっちかというとなんて現世利益的な、何か病気があったりするとお寺に行って布施をすとか、そういうものなんですよ。出家を自分の最終的な帰結としているわけではないんだと思います。しかし『源氏』では、平安の人たちがむしろ日常的に、いつかは出家しなければならないというようなものなんです。源氏の中に書かれている、特に主要な人物のほとんどは、出家は自分の人生のあるべき姿だと決めているようなところがあります。道心など持っていない人は、むしろ軽い人物なんですね。主要な人物では

ない。中国人が考えている道心というものといかに違っているのか、それを光源氏を例に論じて明らかにしようとしたものなんです。

『源氏物語の救済』ⁱⁱ（注：関根賞、第3回孫平化日本学奨励基金賞受賞）は、修士論文の時の研究テーマ「光源氏の道心」を他の作中人物にも広げたものなんですね。日本の平安の時の人がどうしてそういうような信仰心を持っていたのか、それを明らかにしようとしたもので、博論の上に完成したものなんです。

中国の作品は、日本と国際的な環境が違うから、昔から「国のために」とか、そういうものが多いでしょう。日本の『源氏』などはむしろ個人の問題を考える。紫式部は、私が考えるには、仏教によって本当に人間が救済されるのかどうか、それを考えようとしていると思うんですね。そのようなことはたぶん中国の普通の文学作品には表れてこないものだと思います。当時は、平安の貴族たちも、現世では天皇とかになって、それで（退位してから）出家して、現当二世の幸せを獲得することが普通だったらしいんです。しかし紫式部は『源氏物語』の中ではむしろ浮舟のような人を出家させたんですね。光源氏も18歳から出家しようと思っていながら、最後まで出家できなかった。だからそういう人物の描写の中にも、出家あるいは仏教が本当に人間を救済することができるのかどうか、それについての作者の考え方が表れているかと思います。

普通、ほかの作品、女性が書いた作品などはそういう宗教性は薄いんですね。しかし『源氏物語』はそのような宗教性、思想性が高い作品として、他の、例えば日記作品とかよりはずっと高度な出来栄えだと思えますね。

その後は、女性がどうしてあのような文学作品を書いたのか、そこに関心が向いていって、『蜻蛉日記』とか『紫式部日記』、『和泉式部日記』とかという日記文学にも関心を広げています。

これ（注：張龍妹《平安朝宮廷才女の散文体文学書寫（精）/博士生导师学术文库》光明日报出版社，2022年）は昨年出した本なんですけれども、女性たちがどうして散文文学を書くようになったのか、それを追究しようとしたものなんです。現在私たちが考えるのは、散文で書く方が簡単でしょう？しかし古代では違うんですね。中国の女性も古代では、詩をたくさん書いていました。散文を書くようになったのは、20世紀の初めぐらいですよ。だから散文はむしろ、新しい文学、新しい学問、新文学なんです。それが日本ではすでに10世紀、11世紀に女性たちが書いていたんですね。また、その人たちが和歌が書けないわけではなくて、和歌ができるうえに散文を書いていたんです。そのこと、つまり女性と文学の関係について、日本の物語文学、日記文学を通して考えようとしたんです。実は韓国にもハングルというものがあるんですが、韓国の宮廷でもハングルができて200年ぐらい後に宮廷女性がハングルを用いて日記文学みたいなものを書いています。だからそれが、女性の文字があるからできたことなのかどうかですね。

日本の女性の文学が「国文学」として位置づけられていること自体が世界的に稀有なことなんですね。中国の女性も詩を書くんですけども、むしろいかに男性と同じような詩を書くかが大事なことだったんですね。朝鮮半島もハングルがあったんですけども、男性は自分がハングルが読めないということを目指して、いかに自分が知識人であることを証明するんです。だから日本ともまた違って。その点はまた、西洋におけるそれぞれの国の言葉とラテン語とかですね、いわゆる雅語との関係ともかわっているかと思えますけれども。

4. 日本古典文学研究の普遍性/关于日本古典文学研究的普遍性

文学というものは、それが言語によって書かれているから国籍があるように思われるんですけども、本来は国籍のないものだと思います。日本人の中でも本当に中国の漢詩が好きな方もたくさんいますし、私も『源氏物語』を勉強していて、特に『紫式部日記』、『紫式部集』とかを読むようになると、彼女は どうしてこんなに苦しい思いをしていたのかとか、私はやっぱり痛いほどわかるというかな、彼女の思い。1000 年も昔の前にこのような女性がいたって。

昨年、パリの INALCO（国立東洋言語文化大学）で行われた『源氏物語』関係のシンポジウムでも『紫式部集』の身と心をめぐる歌について、発表したんです。普通は身の上意識だと「数ならぬ身（注：取るに足らない身）」って言ったりするんですけども、彼女は「数ならぬ心」といって。そこまで自虐的な自意識がありながら、一方ではすごく傲慢な心も持っているんですよ。どうしてあの時代にこのような人がいたのかなって、思うぐらいですね。彼女はまさに清少納言とかとは正反対な人で、清少納言だったら、たぶん今なら一緒に喫茶店行っておしゃべりしたいような人なんですけども、紫式部だったら、面と向かって親しく話していても本心はどう思っているのかよくわかんないような人で。でも、彼女の作品とか読むと、それはわざとではないんですね。『紫式部集』にある歌を見ると、娘が病気になった時に、女房達が病気が治るようにと祈っている。その姿を見て自分もついに娘のために祈ってしまう。しかし考えてみれば、この世の中ははかないものだから、どうして自分がそんなことをする必要があるのか、と。母性愛というのは普遍的なものでしょう？その普遍的な母性愛にも紫式部はこのような視線を自分に向けてしまう。だから彼女の自意識というものがいかに強いのかですね。

それをまた中国文学に照らしてみるとですね、そのような女性がいたとしても、多分、それを作品として書くことは許されなかったと思います。さっきも申しましたように、女性はむしろ男性にも勝る詩を書かなければならない。朝鮮半島も似たようなところがありまして、朝鮮半島にも女性詩人がいるんですけども、その女性詩人が中国でもてはやされた詩はどういう詩かというと、戦場に行つての辺塞詩や遊仙詩、仙人になるとかそういうような詩がもてはやされたんです。中国の文学の担い手、特に評価の基準が男性の手にあったから、女性は男性の基準にかなうように詩を書かなければならなかったんです。一方で、『源氏物語』のような作品とか、『蜻蛉日記』とか読んでみると常々思うんですけども、特に『蜻蛉日記』では嫉妬心を隠さないんですよ。「彼女には死んでほしい」みたいなことを書いているんですよ。中国だったらそんなの書いてしまったらもう、家族も自分をよけものにしてしまうでしょう。例えば、南宋のある女性詩人は閨怨詩みたいな作品を書いていたんですが、その女性が亡くなると、親が彼女の詩作を全部燃やしてしまうんですよ。そんな娘がいたことが恥だって。女性文学の土壌といいましょうか、そういうのが完全に違うので、そういうことで平安の女性文学に引かれてしまいます。

西洋では、女性が最初は詩を書くことが許されなかったんですね。17 世紀か 18 世紀あたりになってようやく女性が小説を書くようになったんです。最初の西洋の女性詩人サッフォーなどはラテン語で、だから日本で言うと漢字で詩を書いていたことになるんですけども。女性が文学作品を書くこと、どっちの言語を使うか、いわゆるラテン語や漢字のような雅語を使うか、自分の民族の言葉を使うか、そういう問題から見ても、（日本文学の研究は）普遍性のあるものなんですね。

私が考えるには、韓国のハングルというのは、できて 200 年ぐらいたった段階でも男性たちは読めな

いってことを主張するんですね、だからその段階ではハングルはまだ女性文字でした。ダンテが『神曲』を書く時にも、ラテン語みたいな世界に対抗してわざわざイタリアの方言、俗語で書いたんですね。しかし日本ではむしろ仮名は民族の言葉なんですね。日本ではあんなに早くから仮名を使って女性の手によって書かれていた、ということ自体が世界的に（研究する価値のある）普遍性のある問題ではないかなと思います。

5. 中国の日本研究者として/作为中国的研究者

(1) 日本の学術界への貢献/对日本学界的贡献

例えば古典研究などは、中国の研究者が日本の研究に貢献できることはいろんな面があると思いますね。私が日本で発表した論文では、大なり小なり日本の国文学研究者がたぶんあまり気が付かないところとかを論じていると思います。

一つ例を挙げるとですね——私は大きな発見をしたつもりなんですけれども——、「ままこいじめ」ということがあるでしょう。平安の物語の中でもままこいじめ譚は良く出てきます。「ままこ」はみんな「継子」と書いていて、「ままはは」を「継母」とか書くんですけれども、実は、例えば『倭名類聚抄』とか『新撰字鏡』とかを調べるとわかるんですけれども、日本では腹違いを「まま」というんです。腹違いを「まま」というのだから、嫡母、正妻も「ままはは」で、継母も「ままはは」で、庶母も「ままはは」。腹違いが全部「まま」なんです。それが今、ほとんど「継」という字があてられているんですけれども、実は平安の物語で語られているのは、全部、正妻が庶子、ほか腹の女の子をいじめる話なんです。だから本来は、「継」という字を使ってはいけないと思います。継母のままこいじめはですね、中世からの話なんです。私自身が研究した範囲内で言うそうですね、平安時代のはどっちかというと正妻と外の妻の恨みつらみの継母が子供にあたっているというようなところがあると思いますけれども、しかしテキスト自体もずいぶん「継」という字を当てているし、論文も「継子」って。だから今の日本でも「まま」というのを区別していないんじゃないかなと思いますね。それを中国人の視点から見ると、かえって見えるというところがあるんです。

それから例えば、『十六夜日記』の阿仏尼という人物がいるんですけれども、彼女はなぜ京都から鎌倉に裁判に行ったのか。夫が家を最初は嫡子に譲ったんですけれども、その夫が後悔して阿仏尼との間に生まれた子供に譲りたいということになったんですが、嫡子は自分が相続した分は返さないと。京都の法律では、一旦、長男に譲ったのに後悔したのはだめだということになるんですけれども、鎌倉幕府の方は許すんですよね。それで阿仏尼は鎌倉まで行って裁判を起こすんです。日本の研究者はそれが当然、阿仏尼が自分の子供への愛のためにこのようなことをやった、すごく偉いと思っているんですけれども、しかし例えば中国の相続の考えからすれば、阿仏尼は継母にあたるんですけれども、これは継母が長子の相続権を奪うことになるんですよ。だからこういう違う視点を提供することができると思います。そういう例はよくあると思います。

例えば『源氏物語』で、即位した冷泉帝は自分が密通の子だということを知らされたときに、まず光源氏をいかに父親として待遇しなければならないのか、親孝行しなければならないのか、それに苦心するんですよね。しかし中国の「孝」の考え方からすれば、そういうことよりももっと大事なものは別にあるはずなんです。親に仕えることは「孝」でいえば最低段階で、最も大きな「孝」とは立身出世とかで、それによって家門を広げることになって、それが最終的な「孝」になります。そのような思想も実は平安の男

性なら受け入れていたんです。『宇津保(物語)』でも男性的な「孝」思想を受容しているんですけども、私が見るには、女性の書いた物語の中では違っているというか、立身出世とか功名のためではなくて人間的な関係が重視されている、そういう面があります。

(2)中国の学界への貢献/对中国学界的贡献

それがまたこれからの課題だと思うんですよね。中国における日本研究はどちらかというと、独り歩きしているところがあるんですね。私が考えるには、中国における日本研究は、本来は、例えば文学だったら中国文学と連携しなければならない。それから中国における外国文学の研究の一環としてあるべきなんです。私が日研センターとかではなくて、文学部とかで日本文学を教えるというのが理想的で、他の国ではそうじゃないかなと思うんですけども、しかしそれがやっぱり難しいというか、中国の大学の組織とも関連しているからかと思います。中国の大学では外国語学部というのが独立してあるでしょう。中国の雑誌とかもそうになっているんですね。だから日本研究だけになってしまっているところがありまして、中国の文学研究、また中国における外国文学研究とのつながりが薄いんですね。

だからこういう本を訳したのもですね(注:《日韩宫廷女性日记文学系列丛书》重庆出版, 2021 年)、何とかして、日本語の読めない人にもこういう作品があることを知ってほしいと。

それから、例えば現在のフェミニズム関係の理論とかも、実は全部が17世紀、18世紀以降の文学を対象に生まれた理論なんですね。日本にこんなに早く女性文学が生まれたことは考えられていないんです。だから翻訳などを通してそういうフェミニズムの文学理論なども少しずつ補足というか、更新していくことができるのではないかとひそかに思っているんですけども。

例えば日本の日記作品などは、みんな読んだら、「日常的なことしか書いてなくて、だらだらとしてあまり読みごたえがない」とかって言うんです。しかし実は朝鮮半島のものと照らし合わせてみると、その日常的なものがいかに大事なのかかわかってくると思ってですね、中国の読者に、並べるだけでもすぐ違いが分かってくるという思いで、10年間ぐらいかかってこの3冊の本を出したんですけども。何か反響があるといいんですけど。

(書籍の紹介)

这部收集的作品是《梦寐之间》、《十六夜日记》还有《告白》。尤其是像《告白》这样的作品,大家看了会觉得很吃惊,可以把这样的事情写出来,这个哪怕是在现在都是觉得很不可思议的事情。可是在当时中世纪的时候,日本的女性把它写出来了,还是宫廷女性。而且她们也是会写和歌的。像中国有些学者就觉得,中国的女性为什么到后来变得不写诗了,只写散文了,就是因为写诗是需要斟酌字句的,写散文呢,因为她们忙没有时间去斟酌字句了,所以变成写散文了。可实际上应该不是的。像平安朝那些女性,她们既会写和歌,也写散文,所以散文跟诗,实际上作用是不一样的。她们写的意义也不一样。

这一本是朝鲜王朝的三部日记作品,也是宫廷女性写的,她们用她们的谚文(ハングル)写的日记,《癸丑日记》、《仁显王后传》,最后《恨中录》这三部。《恨中录》可能是比较被大家熟知的,韩国有一个电视剧叫《思悼》,(它是以《恨中录》为依据的,)很多人应该看过那部电视剧的。可是这个作品《恨中录》都是我们第一次翻译成中文。这三本书花了十年左右的时间吧。一直就是找不到韩国的古典的翻译人。因为用古典韩文写的作品,某种意义上只有这三部,在中国几乎没有人做研究。所以花了很多年之后,又把这三部作品一起拿出来。一看就能知道这是两个国家的不同的文学。虽然都是女性用女性文字书写的,可是作品的本

質是完全不一样的。我是觉得某种意义上作品的本质的不同实际上是跟中国汉文化的距离决定的，而不是由文字决定的。

韓国の文学作品を間に入れると一層分かることが多いんです。私はこれを読むために、2、3年間ハングルを勉強していたんですけども、全然ものにならなくて。本来はハングルをマスターして、それからベトナムの言葉を勉強して、ベトナムについても勉強しようと思ったんですけども、しかしベトナムは女性によって書かれたものはあまりないんですね。ずっと漢文の世界で、中国のような文選も作られるし。少なくとも東アジアにおける女性と文学の研究を考えるのに、日本は一つの目印みたいなもの、私にとっては一つの契機になっている。また自分の国の文学を見直す、中国の女性の文学を見直すうえでも一つの契機になっています。

6. コロナ禍での国際化、日中の違い/新冠疫情下学术国际化中的中日异同

（新型コロナウイルスの感染拡大は）意外に文学研究などの国際化を促進しているところがありますね。それで、日本と中国の違いといいますか、例えば中国（のオンライン講演会）だと全部公開するでしょう？日本だったら事前に申し込みが必要で、リンク送ってもらって、また会員でなければならなかったりとか。日本のやり方は全部きちんとやっているから。で中国ではおおらかで、意外と普及に役立っているところがあるのではないかと思います。

日本の方は、事前に誰が聞くのか分からないのが不安だとかおっしゃるんですけど、中国的なやり方、オープンで最初から誰が聞くのか分からない、それで結局多くの人に聞いてもらえるということもあるので、何か挑戦というかな、そういうの何とか開放してほしいなと思いますね。

公開：2023年4月20日

ⁱ 秋山虔『源氏物語の女性たち』小学館、1987

ⁱⁱ 張龍妹『源氏物語の救済』風間書房、2000